

足元の災害  
リスクを知る

認定特定非営利活動法人 防災・減災サポートセンター

# ぼうさい・げんさい ニュースレター

被災者ゼロを目指して

2025.1.1発行（年4回） vol.14

## 防災・減災サポートセンターの目的

この法人は、不特定多数の市民・団体に対して、科学技術分野で助言・提案を行い、社会教育、地域づくり、地域安全、災害救援の支援、科学技術の振興の寄与に関する事業を行い、もって公益の増進と自然災害の防災・減災に寄与することを目的とする。



あけましておめでとうございます

2025年 よろしくお願いたします。

## 活動報告

### 第2回防災講演会

日時：2024年11月2日（土）14時～16時

会場：仙台市戦災復興記念館 4階研修室

テーマ；能登半島地震の被害とボランティア

第1部 能登半島地震による道路沿いにみられた斜面崩壊などの概要

講師：正木光一氏（認定NPO法人防災・減災サポートセンター、技術士（応用理学））

第2部 奥能登災害ボランティア体験報告

講師：布原啓史氏（布原地質調査事務所、博士（環境科学））

第3部 パネルディスカッション

主催；認定NPO法人 防災・減災サポートセンター

共催；公益社団法人日本技術士会東北本部応用理学部会

・第6回運営会議 2024年12/7（土）

## 今後の予定

- ・第7回運営会議；2025年 2/15（土）
- ・第8回運営会議；2025年 3月
- ・2025年度総会；2025年 5月

## 防災に関するニュース

1年前の正月元旦の能登半島地震（令和6年能登半島地震）は、マグニチュード7.6で活断層による直下型地震でした。最大震度は7で珠洲市、能登町、内灘町、穴水町などで大きな被害が出ました。津波も発生しました。復旧は主要道路の寸断（主に盛土崩壊）で思うようにはかどりませんでした。

さらに能登半島地域では9月に表.1のように線状降水帯による大雨で土砂災害が発生し、さらなる復旧が必要になりました。いわば地震と大雨の二重被災です。

2024年の大雨災害は7月下旬の梅雨前線と低気圧による北日本を中心とした大雨、8月下旬の西日本～東日本の太平洋側を中心とした台風10号による暴風と大雨、そして能登半島を襲った9月下旬の低気圧及び前線による大雨が顕著でした。

表.1 2024年の日本の主な自然災害

災害の名称	期間	気象の概要	被害の概要
低気圧と前線による大雨（速報）	9月20日～9月22日	東北地方から西日本にかけての広い範囲で大雨。特に石川県能登では線状降水帯による猛烈な雨。総降水量は石川県で500ミリを超え、平年の9月の月降水量の2倍を上回る地点があるなど、北陸地方や東北地方の日本海側では記録的な大雨。	土砂災害発生件数 272件 土石流等：86件 地すべり：26件 がけ崩れ：160件  人的、住宅などの被害は死者16名、重軽症者47名、住宅被害は全国で2425棟
令和6年台風第10号による大雨、暴風及び突風（速報）	8月27日～9月1日	西日本から東日本の太平洋側を中心に大雨。九州では暴風となり、海上では猛烈なしけや大しけ。宮崎県で突風が複数発生。	【被害状況】 人的被害：死者3名 負傷者4名 人家被害：全壊2戸 半壊3戸 一部損壊15戸  人的、住宅などの被害は死者8名、重軽症者134名、住宅被害は全国で4986棟
梅雨前線と低気圧による大雨（速報）	7月23日～7月26日	北日本を中心に大雨。山形県では期間降水量の合計は400ミリを超え、平年の7月の月降水量を大きく上回る記録的な大雨となった所があった。	山形県、秋田県では死傷者（合計死者5名 軽症者5名）が出ており、栃木県、新潟県、滋賀県と合わせ住宅被害（全半壊、床上床下浸水等）合計1399棟が発生した。
令和6年能登半島地震	2024年1月1日	①発生日時 ○令和6年1月1日 16:10 ②震源及び規模（暫定値） ○場所：石川県能登地方（北緯 37.5 度、東経 137.3 度） ○規模：マグニチュード 7.6（暫定値） ○震源の深さ：16 km（暫定値） ③各地の震度（震度5強以上） 石川県 震度7 志賀町、輪島市 震度6強 七尾市、珠洲市、穴水町、能登町 震度6弱 中能登町 震度5強 金沢市、小松市、加賀市、羽咋市、かほく市、能美市、宝達志水町 新潟県 震度6弱 長岡市 震度5強 新潟中央区、新潟南区、新潟西区、新潟西蒲区、三条市、柏崎市、見附市、燕市、糸魚川市、妙高市、上越市、佐渡市、南魚沼市、阿賀町、刈羽村 富山県 震度5強 富山市、高岡市、氷見市、小矢部市、南砺市、射水市、舟橋村 福井県 震度5強 あわら市	被害は石川県を中心に、新潟、富山県など。人的、住宅などの被害は死者463名（内災害関連死235）、重軽症者1,380名、住宅被害は141,756棟。

気象庁：[https://www.data.jma.go.jp/stats/data/bosai/report/index\\_1989.html](https://www.data.jma.go.jp/stats/data/bosai/report/index_1989.html)

消防庁：[https://www.data.jma.go.jp/stats/data/bosai/report/index\\_1989.html](https://www.data.jma.go.jp/stats/data/bosai/report/index_1989.html)

国土交通省：[https://www.mlit.go.jp/mizukokudo/sabo/saigai\\_sokuhou.html](https://www.mlit.go.jp/mizukokudo/sabo/saigai_sokuhou.html)

の資料による。

世界各地でも自然災害が発生し、ヨーロッパではドイツで大雨による河川の氾濫や浸水などの被害が出ています。また、チェコやポーランドでも洪水が発生し、浸水被害や橋が流されるなど大きな被害が出ました。ヨーロッパ東部のスペインでも、豪雨によってバレンシア地方で死者200名が出るなど大きな被害となりました。2024年5月にはアフリカのケニア、ウガンダなどで豪雨や洪水、土砂災害で住宅、農地、道路などに大きな被害が出ました。南米ブラジルでは最南端の州で5月に豪雨により洪水が発生し、80名以上の死者、12万人以上の避難者が出ました。アメリカ合衆国では9月下旬にハリケーン「ヘリーン」が南部に上陸し、死者が160

名以上となりました。ハリケーンの規模が大きいことと（直径500km）、これまでハリケーンの来襲がほとんどなかったノースカロライナ州西部で被害が大きかったです。日本を除くアジアでは東南アジアのフィリピンでシアーラインによる大雨の影響で1月に洪水や地すべりが発生し、住宅やインフラ、人的被害が発生しました。洪水や鉄砲水は3月～4月にインドネシア、パキスタン、中華人民共和国、キルギス等で発生し、5月～7月にはアフガニスタン、スリランカ、イラン、バングラデシュ、インド、ネパールで発生しました。台風は7月から被害が発生しはじめ、中華人民共和国、フィリピン、台湾などで被害が出ました。地すべりは、ベトナムやインド、イン

ドネシアなどで発生しました。  
地震は前述のように1月に日本でM7.6の地震が能登半島で発生しました。4月に台湾沖 (M7.2)、日本 (愛媛県、高知県、いずれもM6.6)、8月に日本 (宮崎県日向灘でM7.1) が発生しました。

火山噴火はインドネシアで4月、11月に発生し、12月にフィリピンで噴火、火災流がありました。

([https://www.adrc.asia/top\\_j.php](https://www.adrc.asia/top_j.php) アジア防災センターHP 2024/12/27)

## 第2回防災講演会報告

開催日；2024年11月2日

会場；仙台市戦災復興記念館 4階研修室

参加者；17名

配布資料なし

第1部 能登半島地震による道路沿いに見られた斜面崩壊などの概要

講師：正木光一氏 (認定NPO法人防災・減災サポートセンター、技術士 (応用理学) )

第2部 奥能登災害ボランティア体験報告

講師：布原啓史氏 (布原地質調査事務所、博士 (環境科学) )

第3部：パネルディスカッション

### 講演内容について

#### 第1部 能登半島による道路沿いに見られた斜面崩壊などの概要 (NPO会員 正木光一氏)

- ・斜面崩壊は本地域の地形と地質並びに地質構造に大きく支配されている。
- ・急峻な隆起地形のところに崩壊が集中している。発生域は震源地を含む半島北部に集中している。
- ・構成地質は中新世から鮮新世の珪質な泥岩や頁岩の堆積岩と火山岩で、クラックなどが潜在、顕在化している。スレーキングや風化、同斜構造のほかに複雑な撓曲構造も影響しているようだ。
- ・当然ながら地質的に脆弱部が様々な形で崩壊、崩落、すべり、応力開放を発現させている。
- ・埋め立て地や盛土部での液状化や沈下、道路等での盛土崩壊も発生している。沿岸部では顕著な隆起が見られる。

- ・崩壊は多様で、表層崩壊、深層崩壊、クサビ崩壊などで、地すべりの活動もある。
- ・法面对策工におけるアンカー工の飛び出し、井桁擁壁の押し出しなどが確認されている。
- ・生活環境は斜面の裾部や狭小な平野部という厳しい環境にある。

(感想)

- ・活断層は多数確認されているが、それぞれの活性度や今回の地震動との関連性は不明
- ・今回の被害の後退性や豪雨等による複合災害については要警戒で、広範囲の調査が望ましい
- ・インフラの耐震性(経年劣化、地質の特性、フェイルセーフ・・・)が懸念されます。

#### 第2部 奥能登災害ボランティア体験報告 (布原地質調査事務所 布原啓史氏)

- ・活動内容(工程、ごみ分別、活動の環境など)が写真で詳しく説明された。
- ・現地での活動組織の運営状況と支援活動の紹介と課題について説明があった。
- ・被災者の負担減少をめざすボランティア活動が効果的に実施されるための環境整備について提言があった。

(感想)

- ・専門技術者がこのような活動により社会とのつながりを持つことの意義を感得することができた出来た。技術者として機能とコストだけを追求しているだけではない、もう一つ関心を持つべきものがあると感じた。
- ・災害時に行政がどう動くのかについての役割分担を明確にすること、日ごろできていないことはいざとなった時にできるはずがないことを痛感した。
- ・これまでの大災害での復旧、復興の経験が活かされないのはなぜか、災害文化の醸成について考えさせられた。

## ・パネルディスカッション（パネラー 濱崎英作氏）

- ①発災前に備えるべきこと(技術者として、ボランティア活動家として)
- ②発災後にすべきことについて参加者を含めて活発な意見交換がなされた。

- ・今回の災害で、地域の特性についての学習したことを復旧・復興に活かしたい。  
(例えば、道路盛土などでは、被災例を参考にして改良すべき点がある)
- ・孤立集落の問題は大きな課題である。情報通信基盤整備をすることが不可欠である。
- ・被災者というか市民の目線で行政が行うべきシステムづくりが必須になっているのではないか。
- ・ボランティア活動は技術者にとって、関心を持つべきことで、少なくとも支援・支持できる人でありたい。
- ・ボランティア活動は、他のことと同様で、知識+ノウハウ+能力+やる気を有してのつながりである。
- ・自然災害への関心が、日常的に関心を持つことが必要であり対岸の火事だと思っはいけない。
- ・有効、適切な情報は極めて重要で、それが正確に伝達されることが必要になっている。
- ・地方の特性や文化を活かした対応が痛感される。行政の一元化すべきことと多様化すべきことがあるような気がする。
- ・災害現場へ行って、実態を体験する中で課題が見えてくる。その発信は極めて重要なことである。  
メディアとしての役割を重要視したいし、産官学の役割も再考すべきである。
- ・ボランティア活動時における兵站について、モノだけでなく確固たる指令的な組織の一元化が必要で、使命感を有する人材の養成に努力すべきである。

## (感想)

1. 自然災害の備えは、正しい知識を持って、あらゆる機会にリスクを理解しておくことが必要であり、  
地震は自然現象で、震災は社会現象であることに気づいてもらうようにすべきではないかと改めて感じた。今後は、事例を参考にして地域の特性に合った提案がなされるべきであろうと思います。
2. 科学技術者と被災者は医師と患者のような関係で、十分な説明とインフォームド・コンセントが基本的な要因になるような気がします。  
被災者にとってのつらさは、暮らしへの決定権が奪われることでしょうか。専門的な見地からさまざまなアドバイスができる発信力が必要とされているのだと思います。そういう意味でのボランティア活動は専門家が社会と直接につながることで起こる事態は広い普遍性を持つことに気づくことにもなると感じます。専門家の能力が随所で必要とされていることに気づく必要があると思います。



パネルディスカッションの様子

## アンケートから

<p>第1部 能登半島による道路沿いに見られた斜面崩壊などの概要</p> <p>1-1 被害状況がわかりやすく説明されていた <b>4.8</b></p> <p>1-2 崩壊の素因（地形・地質）が理解できた <b>4.1</b></p> <p>1-3 斜面等の危険度を知るためのヒントが得られた <b>3.9</b></p> <p>1-4 二次災害やリスクの潜在化について知ることができた <b>3.9</b></p> <p>1-5 住民への周知と対応について基本的な知識が必須である <b>4.1</b></p> <p>1-6 復旧や復興する上での課題を知ることができた <b>4.1</b></p>	<p>（ご意見）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地質リスクを無視した社会資本整備の結果である。</li> <li>・立地条件の厳しさと地質条件が大きな要因だと感じた。</li> </ul> <p>（アンケート感想）</p> <p>被害状況をよく理解していただいたと思っています。</p>
<p>第2部 奥能登災害ボランティア体験報告</p> <p>2-1 体験された内容が良く説明されていた <b>4.9</b></p> <p>2-2 体験が防災にどう活かされるのかを知ることができた <b>4.3</b></p> <p>2-3 ボランティア活動の意義について理解を深めた <b>4.3</b></p> <p>2-4 被災者から学んだ教訓を、今後に生かす必要がある <b>4.4</b></p> <p>2-5 ボランティア活動に参加する上での課題を認識した <b>4.6</b></p>	<p>（ご意見）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・技術者が社会と直接的につながることの大切さを知った。</li> <li>・問題点が明確になった。備えがなかった。</li> </ul> <p>（アンケート感想）</p> <p>活動内容が理解され、課題が明確になったと感じられた気がします。</p>
<p>パネルディスカッション</p> <p>3-1 テーマが明確になっていて意味があった <b>4.1</b></p> <p>3-2 提案型の意見が多く示されて、参考になった <b>3.7</b></p> <p>3-3 被害を少なくするための、ヒントが得られた <b>3.4</b></p> <p>3-4 防災・減災では 観察→状況判断→意思決定→行動 することの重要性が共有できた <b>3.7</b></p> <p>3-5 技術者として伝達できることがあることが話題にされた <b>4.3</b></p> <p>3-6 フロアからの意見も あって、活発な討論ができた <b>4.0</b></p>	<p>（ご意見）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・正しい知識に基づく、それぞれの役割を知って、日ごろからのネットワークが大事なような気がする。</li> </ul> <p>（アンケート感想）</p> <p>技術者の視点から被災状況とボランティア活動報告を学んでいただいたと思っています。</p>
<p>各項目ごとに、5段階での評価を質問して、総合合計した上で、平均評価にしました。</p> <p>（例）非常にそう思う<b>5</b>、そう思う<b>4</b>、どちらでもない<b>3</b>、そう思わない<b>2</b>、全く思わない<b>1</b></p> <p style="text-align: center;">5 (5人) 4 (21人) 3 (8人) 2 (3人) 1 (1人) = 25 + 84 + 24 + 6 + 1 = 140点 (38人) (平均 <b>3.7</b>点)</p>	

アンケートの項目は、上の表の右の項目で、参加者に5点法で評価していただいた。その平均点を赤字で示しました。

また、今後のNPOの行事について興味のある項目をあげてもらったところ、「災害リスクに関して」と「災害に遭遇した時の対処法」についての関心が高いことがわかりました。

能登半島地震による被災地では、いまだに復興が進まずにいますがその地震被害の後に覆いかぶせるように発生した豪雨災害が様々な影響を与え、復旧・復興に様々な支障を与えているという報道があります。このようないわゆる複合災害は、どこでもいつでも起きうるものです。以下にその複合災害についてわが身に置き換えての思いを以下に述べてみました。

1. 一番に衝撃を受けたのは、あの地震の後に大雨があって避難所が水害にあっってしまったことです。せっかくの仮設ながら安心したところだったのに、再度追われるように避難を余儀なくされたことに涙しました。狭い土地で仕方がなかったとはいえ、複合災害に対して事前的な策がなかったのだろうか。
2. 地震の後の豪雨災害があれば大変だということは、多くの方が言われてはいたものの、そこまで考えが及ぶ余裕というか、ないものと思っていたのかもしれない。もし、豪雨があってから地震があったらどうなっていたのかを思うと、地震発生の時間帯にもよると思いますが、被害状況はどうだったのでしょうか。自然災害の無情を感じています。
3. 報道の写真を見ると、山肌がことごとくはぎとられている様子が見てとれますが、土砂と流木が土石流または地すべりとして下流部に及んだのだろうと思います。

災害調査の時点で、この後で雨が降ればどのようなことが起きるのかという、次の災害の起こり方を診断することの重要性を感じています。おそらく、専門家はわかっていることと思いますが、それをどう伝えていくのが難しいのかもしれない。住民も行政も、研究者もその辺を課題にして解決へ向かってほしいと思います。ハードとソフトとの融合が言われていることも考えれば・・・
4. 関係学会や行政の方々が、現場に入って様々な知見を持ち寄って、現象やメカニズム、対応などを話し合っていると思いますし、住民に対しても様々な報告をされているようです。大事なのは、住民がそれを理解するための基礎知識があるのかどうか、普段からの知識がないと自分に関係するところだけのつまみ食いになって、地域の復興につながらないのではないだろうか。
5. 災害に関する法律はたくさんあって、様々な取り扱い方があると聞いています。色々あるということは、一見あらゆることに対応できるようにきめ細かくできているともいえますが、東日本大震災で見ると、かえって余計な或いは不都合なことが生じているようで、災害に関しての法律は、むしろ大きくくりで、その災害の特性に合ったものを適用できるものにすべきだとも考えられるのではないかと。つまり地域や住民の暮らし方に合わせた構想で復旧や復興をすることが望ましいような気がします。それが、地域全体、流域全体を考えての機能保全とコスト縮減につながるような気がします。
6. 災害が発生すると様々な専門の研究者や技術者、行政機関の人が、それぞれの領域で活動されると思いますが、今回の能登半島の災害を見るにつけ、失礼ながら次のことを感じてしまいます。
  - ①様々な知見などがあったのに、地震のリスクをもっと住民に伝えることができなかつたのか。もちろん、時期や規模を想定は不能ですが、地震の発生や被害の想定が周知していれば相当に備えという点で違っていたような気がします。
  - ②地震で発生した様々な土砂災害を調べて、二次災害などについてアドバイスが住民に伝わっていたのか。よく言われる、建物などが半壊したものは、次のちょっとした外力に耐えられないのは経験から分かっています。つまり、地震後に危険が潜在化していることを、もっと住民の方々が理解していれば、悲惨なことが避けられていたような気もします。

大規模災害には二次災害や後遺症が必ずあるわけですので、住民の方々にはそのことを理解してもらうことが大事なことになると思いますし、避難から帰宅という判断時にも十分そのリスクを理解した上での備えをしておく仕組みも考えなければならないと思います。

③実際には、人材不足、気持ちに余裕のない復旧や復興中ですので、できるだけ外部の支援を受けられるような集中的な支援体制ができることをすべきだと思います。

もちろん、個々への対応は住民が望んでいる部分もありますが、それとは別に、能登半島の文化や風土を守りながら、どうすれば安全で安心な暮らしが継続できるのかを大きな視点で考える会議的なものの設立が必要ではないのでしょうか。

## 地域を知るといふ事！

呼び方には意味がある？  
“ぬけ”と“ざる”

人間の暮らしの中で、住んでいるところを示す一つに地名があります。その命名は地域の特徴や大きな出来事などが由来になっているものは少なくありません。いわゆる災害地名といった言い方で、かつての災害を忘れないようにとすることで名付けられたものもあります。その一つに、様々地方に共通ともいえるのが蛇抜けとか蛇抜きといわれる地名が残されています。たびたび繰り返される土石流が発生したところでは、つまり、いつかは同じことが起きる要素が存在しているということを示しています。そのようなところは、緩傾斜の広い土地になっていて、かつ都市部に近いとなると開発の対象となることがあります。2014年8月の広島（安佐南区）土砂災害はまさにそのようなところで起きました。災害が起きてから気づくことも多々ありました。

古地図に残る災害地名は数多くあって、その背景を調べることで、防災のヒントを得られることも少なくありません。近代になって都市化が進むと居住する範囲が拡大して、これまでの暮らし方が変化します。そうすると、これまで地域で共有されていた災害文化も薄弱になり、地名が忘れられその由来を知ることなく開発されてしま



つまり、かつての災害の痕跡が埋蔵されてしまいます。自分たちが住んでいるところはどんなところだったのかを知ることには大変重要なことで、地域の人たちがリスクを共有することが大切なことです先に抜け(ぬけ)の話をしてきましたが、同じような感じの言葉に筈(ざる)があります。実は、仙台市太白区に筈川という名取川にそそぐ一級河川があります。川は一部新筈川として改修されていますが、

よく他の都市でも見られる小さな流れの川です。そこで、この筈川の地名考を紹介したいと思います。この河川は実は20km余りと大きなものではありませんが、面白いことに、名前が上流から佐保川、紅(べん)堂川、鉤取川(こすず川)、唐松川(笠松川)、阿賀川、筈川と名称が変わります。下流の筈川は地盤が軟弱で水がちまち川底に吸い込まれるということに名前の由来があるといわれています。一方で、暴れ川とも言われていて、かつては大雨で浸水被害もあり、急な増水には耐えられずに溢水するというものようでした。逆に周囲の地下水位を低下させて水田が陥没したり井戸の湧水を起こしたりすることもあったようで、いたずら川とも言われていたそうです。筈川は伏流水となって名取川と広瀬川との合流点に分布する粗粒砂礫層へと連通するものと推定されています。この伏流水は名取川湧水ゾーンに関わり、地場野菜仙台セリの栽培地に関わっています。これらの現象からすると、雨水が直接の供給源となっている浅層地下水の挙動が筈川のメカニズムでもあるということになります。

地形区分を見てみると、川の周囲はやや高い自然堤防と背後には広い氾濫平野が広がっていて、旧河道も見当たります。また、氾濫平野の中には後背低地もあって、湿地に近いものもあります。地形区分は特別特徴があるものではありませんが、かなり蛇行性のある河川で、本来は周辺が遊水する環境にあったようにも見えます。かつては、このような河川環境が地域にさまざまな治水機能を果たしてきていたのだと思います。

都市部には旧地形図に示されているような小河川やそれに関わる水路網が、河川改修な

# 自然災害についての防災Q&A100 好評発売中！

お求めは金港堂仙台市内各書店、みやぎNPOプラザ、直接当NPOへ電話、メール等でお申し込みください。（定価税込み 1,100円）



## 自然災害についての防災Q&A100 目次の一部

1. 自然災害とは何か、自然災害はなぜ起きるのか
2. 災害列島といわれている理由は何か
3. 日本列島の災害に関係する地質的特徴は何か
4. 自然災害の発生には理由がある、そのわけは？
5. 人間はなぜ自然災害が起こりやすいところを居住域とするのか
6. 人の活動が自然災害を呼び込んだ事例はあるか
7. 人間の活動により発現する現代災害とはどのようなものか
8. 自然災害とはいえ、社会環境と極めて関連しているといわれるのはなぜか
9. 防災に取り組むうえで、自主的にできることは何か
10. 人口減少社会における自然災害対応で留意すべきことは何か

発行；認定特定非営利活動法人  
防災・減災サポートセンター  
住所；宮城県富谷市ひより台2-11-3  
電話；022-358-9151  
URL；<https://bousai-support.or.jp/>  
メール；[info@bousai-support.or.jp](mailto:info@bousai-support.or.jp)

どや付け替え、暗渠化というような排水システムが変化している中で、思わぬ水害リスクが潜在している可能性があります。浸透、遊水する機能を喪失、一気に河川に集中するリスクも有り、経験や設計を超える事象に対しては十分ではない状況になります。都市部で見られるこのような、かつての水路網の集約が、今後の都市部の水害の盲点になる可能性も知っておきたいものです。

策川は蛇抜けと違って災害地名ではありませんが、水理地質的な意味を表現した地名で、地名を付けて河川とともに暮らしてきた災害文化の意味は忘れてはいけないと思います。

水害に対するの対応としては関心（履歴、土地の成り立ち、地名の由来など）＋用心（水害は思わぬところで、時期）＋兆候（情報と判断）を見逃さないこと等が防災への基本になると思っています。

## 会員募集

特定非営利活動法人防災・減災サポートセンターでは、一緒に活動していただける会員を募集しております。また、いろいろな制約で一緒に活動できない方の賛助会員としての参加も大歓迎です。

年会費 3,000円（入会金はありません）

### お申込み方法

入会申込書に必要事項を記入して、事務局にメールまたは郵送などでお送りください。

（入会申込書は、下記のURLの「入会ご案内とご寄付のお願い」の「入会ご案内」の様式、内容でお願い致します）

2024年12月現在 正会員21名、賛助会員21名  
賛助会社 2社

